

「ワタシとあなたでつくる寺」

主査 義盛充香(中標津町・法園寺)

◎当初

今でも鮮明に覚えている。第一回部会で集まった部会員の不安そうな顔・顔・顔。恐らく主査である私自身が、最も不安そうな顔をしていたに違いない。初めての大会を仰せつかった上に、正直に言うと、この部会では何をしていくのかが、ぼんやりとしかわからなかったからだ。主査がこうなのだから、部会員が不安に思うのも無理はない。とにかく、講師の四衛先生に付いていこう、お任せしようと思ったのだった。

集まった部会員は、住職・坊守・若院・若坊守・教務所員と立場がバラバラだった。研修会や座談に慣れていない者もいた。また、お互い初対面という者も多く、まずは発言しやすい雰囲気作りに努めた。そのため、有教師資格者とそうではない者の見えない壁を感じる、間衣・輪袈裟や坊守章等の立場を示すものは着用しないこととした。

◎変化

私も含め、最初は教務所へ入るのもおそろおそろといった感じだった女性たちが、3回、4回と部会を重ねるごとに生き生きとした。表情が明るくなり、どの部会員とも楽しげに談笑している。座談等で意見を出す回数も多くなり、課題や作業にも意欲的に取り組んでくれた。「人は場を与えられると、これほど輝くのか」と思った。

また、部会員全体の意識が変わったと決

定的に感じたのは、公開講座の内容を話し合った時だった。いくつか案が出て多数決を採ったが、よくある「講義を聴く」というスタイルには一票も入らず、出た案の中で最も難しいと思われた「カフェ」

が選ばれたのである。その時、「前例もなく、失敗する可能性が断然高いと思われることに、私たちは『チャレンジする』という意志を持ったのだな」と感じたのだった。これは、四衛先生の講義から、今まで聞いてきた講義や法話とは違う何かを部会員が感じ取り、意識改革がもたらされた結果なのだと思う。

私たちは今まで、知らず知らずのうちに内向きに背中を丸めてじっとしていたような気がする。ご門徒さんや他のお寺さん、ひいては宗祖に対して、どことなく後ろめたかったり、自信がなかったり。だから下を向いてしまう。そのような私たちは、四衛先生に「いい加減、下を向いているのをやめ、自分ができるところを小さなことでもひとつ取り組んでみよう」とおっしゃっていた。KJ法や他のお寺への取材、『お寺の教科書』(徳間書店)を使って自坊を客観的に見るといふ課題等で背中を押していただいた。また講義で触れられた、親鸞聖人の越後や関東での様子を想像すると、「私たちはまだ何かできるはずだ」と思えるよ



うになった。

◎大会を終えた、今

私たちの様子を見て、「小手先の技術に走っているのではないか」「人集めばかりに一所懸命になっていないのか」「人集めばかりに意見をいただくことがある。これもありがたなことだと思う。私たちや未来のことを案じて言ってくださっているのだ。そして、それだけこの教区御遠忌に際して、強い願いや思いが込められていることがわかる。「あなた自身のやっていること、やろうとしていることの本質は何なのか。何を大事にしなければならぬのか。それを常に考えなさい。」と言われていた気がする。一人で考えていては、考え違いをしてしまうかもしれない。教えから逸れていってしまうかもしれない。それを確かめ直すために、私たちは御遠忌大会後にメーリングリストを作り、お互いの近況報告や相談をしたりして、意見を聞いている。これを私たちは「ネットワーク」と呼び、長く続けていきたいと思っている。

最後に、立場がバラバラな者たちが自由に意見を交わすことのできる場が、ぜひ今後増えることを願う。この部会は、そこに大いなる意義と相乗効果があることを見出したのだから。

